

一九世紀における近世明君像と「仁政」・「富国」論

小関 悠一郎

はじめに

近世日本では、「明君(名君)」「賢君」「明主」などと呼ばれた将軍・大名が数多く輩出した。江戸時代二百数十年の間に十数代を重ねた将軍家・大名家には、それぞれ「英傑の藩祖、初期の明君、中興の英主などと評される君主が一人や二人は必ずいる」といわれる^①。近世の「明君」については、「民本徳治」の政治思想が共有された東アジア世界の政治文化をめぐる比較的研究の一論点として、近世日本の政治文化の特質、社会各層の思想形成と政治常識の形成、幕藩政改革の展開等との関連で注目されてきている^②。これらの研究で史料としてクローズアップされたのが、近

臣らの直接の見聞に基づく言行録・逸話集を典型として、将軍や藩主の言行や治績を描き出し顕彰した書物^③「明君録」である。将軍や大名を対象とした日常の起居動作に及ぶ君主論であると同時に、近世東アジア世界で通有された「仁政」という人民統治の理念を反映したものであることが注目されてきたのである。

本稿で目を向けたのは、「仁政」や「牧民」といった理念が、近代以降の民衆の政治意識や地方行政思想を解明する上での論点とされ、明君像についても、「仁政イデオロギー」論の観点から近代以降まで見通そうとする研究が現れてきていることである。例えば、徳川将軍の日光社参を中心とした近世近代移行期の治者像を考察した榎田有希子は、東幸時の明治天皇の行動が徳川将軍の明君像に通じるもの

だったことを明らかにしている⁴。これらの研究は、「明君」と呼ばれた将軍・大名の人物像形成や変容について、時期・時代による社会的な磁場の相違に留意しつつ、一九世紀を通じて検討が必要であることを示していると考ええる。

こうした検討を行うにあたっては、近世後期にかけて徐々に「仁政」論が変容していく、という見通しが示されていることも見落とせない。そもそも、近世日本の「仁政」は、政策的には平時の農業基盤整備（勸農）と非常時の救済策（御救）を軸としていたが、幕藩財政の逼迫や対外関係の緊迫化に伴って、幕藩の財政収入増大（国益）が「仁政」実現に不可欠の課題とされ、幕府・諸藩を単位として想定する「富国」の語が政治理念化して重要性を増し始める。民百姓の生存・生活保障の面でも、善行者の表彰や講釈・教諭書等による「教化」政策を通して、経済社会に対応するための主体的努力が説かれると同時に、「民利」の確保・「民力」の充実といった、民間の経済的安定を重視する政治意見が多く見られるようになるのである⁵。このような「仁政」論の変容は、「富国強兵」が政治的課題となる幕末から明治期にかけての近世大名明君像のありように、いかに関わっているのだろうか。

本稿では、以上を踏まえて、近世に形づくられた明君像が、近代以降にどのように接続し、変容していくのか、

「富国」という政治理念を意識しつつ、考えてみたい。考察にあたっては、近世の書物・出版をめぐる研究潮流と相俟って深められた「明君録」についての研究を踏まえ、刊行書籍に焦点を絞って明治期における明君像のあり方を検討した上で（第一節）、近世後期における明君像の変容との関係について考察したい（第二節）。本稿は、人物顕彰そのものというよりは、「明君」という表象に注目して人物像の形成と変容を考察するものだが、一九世紀日本の人物顕彰に密接に関わる動向として検討してみたい。

一 明治期における近世明君の描出

(1) 代表的近世明君の措定と共通認識化

一九〇九年八月、大韓帝国皇太子李垠を伴って東北・北海道を巡遊⁷し、秋田を訪れた伊藤博文は、秋田市長を務めていた大久保鉄作に対して、次のように述べたとされる。すなわち、「我が日本封建時代、名君の誉を馳する者四人、紀州南龍公、備前新太郎少将、肥後の靈感公及び上杉鷹山公……天樹院公の明賢……加へて以て天下の五名君と称す可し⁸」と。秋田藩主佐竹義和の事跡を大久保自身がまとめた『天樹院公政績一斑』に接した伊藤は、近世の代表的な

「名君」として、紀州藩主徳川頼宣、岡山藩主池田光政、熊本藩主細川重賢、米沢藩主上杉治憲(以下、鷹山とす)を挙げ、これに佐竹義和を加えて「天下の五名君」と称すべきたと提案したというのである。

伊藤の発言は明治末年のものだが、右のような近世明君認識は、それ以前からかなり広く共有されていたと考えられる。例えば、川村惇著『米沢鷹山公』を紹介した『読売新聞』の記事には、「鷹山公の名ハ世の人既にこれを知ると雖ども、彼の徳川光圀の如く、池田新太郎の如く、若くハ(保科)筆者注松平正之・細川重賢等の如く……」¹⁰とあり、伊藤が挙げた「名君」に加えて、水戸藩主徳川光圀・会津藩主保科正之の「治国経綸の偉蹟」が広く知られていたことが示されている。また、秋山悟庵『上杉鷹山言行録』(内外出版協会、一九〇八年)では、「徳位を兼備せる明君……徳川幕府三百年間に……偶々徳川吉宗、水戸黄門、池田芳烈、上杉鷹山、松平楽翁等の明君賢主があつた」とされ、八代将軍(紀州藩主)徳川吉宗、幕府老中(白河藩主)松平定信も「明君」の代表と見なされていたことが知られる。

挙例には多少のずれも含まれているが、これらのことから、明治末年には、保科正之・徳川頼宣・池田光政・徳川光圀・徳川吉宗・細川重賢・上杉鷹山・松平定信らが、近世を代表する明君に措定され、それが概ね共通認識化して

いることが知られるのである。この点に関して、一九一五―一九一七年に刊行された『日本偉人言行資料』は、右の将軍・大名をはじめとする近世の「名将」「名君」の言行録を集成したものが¹¹、「正確なる史伝」「趣味ある読物」「絶好の修身資料」として、「教育修養の用に供せんがため、広く家庭若くは学校等に備へられるべきものとして売り出されている。二〇世紀初頭にかけてもなお、幅広い読者を想定して近世明君の言行録が刊行されていたことが知られる。上記の代表的近世明君の人物と事績は、このような近世「偉人」群の規範的な地位を占めて、人々の歴史像・意識に小さくない影響を及ぼしていたといえよう。

さてその一方で、伊藤博文と大久保鉄作との間で、秋田藩主・佐竹義和が新たに明君の代表に付加されようとしていたことも見落とせない。大久保鉄作から『天樹院公政績一斑』を呈された伊藤博文は、「君宜しく公の詳伝を編著し、公の大節を世に著はして可なり」と大久保に伝記の執筆を促す一方、帰京後に『天樹院公政績一斑』を明治天皇に献上し、秘書官古谷久綱を通じて、大久保に「佐竹天樹院公遺墨……略伝と共に普通伝献の手續に依らず、帰京参内の砌り、直接 聖上陛下に献上致し、其際天樹院公の秋田開発に関する功績等も逐一奏聞に及べり」と伝えている。これをうけて、秋田の各新聞への「天樹院公逸事」連載

〔大久保執筆〕を経て『天樹院佐竹義和公』が刊行され、佐竹義和明君像が広く知られるようになるのである。¹³⁾

この経過で注目されるのは、「開発に関する功績等も逐一奏聞」とあるように、佐竹義和について、伊藤が特に「開発」関連の事跡を重視していたことである。そこで、『天樹院佐竹義和公』の内容を見てみると、自序から論賛に至る二二章、二八七頁のうち、「第五章 政務革新と財政整理(五四頁)」と「第十四章 産業(四二頁)に突出して多くの頁が割かれている。「公の遺志を紹述して、推奨助け、教育の振興を計り、産業の隆昌を希図し、本県の飛躍……帝国の発展に猷芹の微衷を致さんと欲す」ともあるように、大久保は、産業の発展(および教育振興)を課題として、それによる「本県の飛躍」を「帝国の発展」に結びつけて捉え、それらの課題に資するものとして佐竹義和の「名君」像を描出したのである。以上から、徳治の実現や御家意識を基調とした近世明君像の変容が窺えるのである。

(2) 刊行書籍に見る上杉鷹山明君像

では、明治期における代表的近世明君の措定とその描出は、具体的にどのように進んだのだろうか。ここでは上杉鷹山を例に、刊行書籍に注目して検討してみよう。

まず、明治年間に出版された、上杉鷹山を取り上げた書

籍のうち、主要なものを見なされるものを挙げておこう。

- ①新貝卓次編『羽陽叢書(知新堂権平、一八七九年)』
- ②『興業殖産亀鑑(村上勘兵衛、一八八七年)』
- ③伊佐早謙編『米沢藩衰弊録(米沢活版四州舎、一八九〇年)』
- ④重野安禔他編『稿本國史眼(大成館、一八九〇年)』
- ⑤安積五郎・田中登作合著『国民修身書(普及舎刊、一八九一年)』
- ⑥重野安禔編『尋常小学修身(八尾編輯所刊、一八九二年)』
- ⑦学海指針社編『皇民修身鑑(集英堂刊、普及舎、一八九二年)』
- ⑧麻績斐『上杉中興美談(麻績斐、一八九三年)』
- ⑨杉原謙著『水魚篇(杉原謙、一八九二年)』
- ⑩岸上操編・内藤耻叟校訂『少年必読日本文庫 第一〇編(博文館、一八九二年)』
- ⑪米沢鷹山公(朝野新聞社、一八九三年)』
- ⑫渡部乙羽『上杉鷹山(博文館、一八九三年)』
- ⑬内村鑑三『Japan and Japanese(民友社、一八九四年)』
- ⑭小宮山綏介『徳川太平記 第九編(博文館、一八九五年)』
- ⑮杉原謙著『位戸太華翁(杉原謙、一八九八年)』
- ⑯小山左文二・古山榮太郎『修身教本高等小学用(一八九九年)』
- ⑰池田成章編『鷹山公世紀(吉川弘文館、一九〇六年)』
- ⑱秋山悟庵『上杉鷹山言行録(内外出版協会、一九〇八年)』

この一覧からは、一八七九年に刊行された『羽陽叢書』を皮切りに、明治年間に一定数の上杉鷹山関係書籍が刊行

されたことがわかる。その内訳は、旧藩士など米沢藩上杉家の関係者の手になる歴史書(①③⑧⑨⑮⑰)、一般向けの歴史読み物類(⑫⑬⑱)がその主なものといえるだろう。また、当該書籍に占める記述の分量には相当の違いがあるが、上杉鷹山の逸話を採用した検定時代の修身教科書(⑤⑥⑦⑯)、アカデミズムの学者が関わった通史的歴史書など(④⑩⑭)も一覽に含めてみる。

この一覽で最も注目されるのは、一八九〇年代前半が上杉鷹山に関する書籍刊行の大きな画期になっていると見られることである。明治維新後の二十数年間、鷹山の事跡は近世に成立した写本類の他は、米沢藩上杉家の関係者の手になる書籍によって知られるにとどまっていた。⑪川村惇『米沢鷹山公』によれば、「治蹟の燦然観るべきものも、只だ僅かに旧藩秘書の中に珍藏せらるゝのみ」で、「広く世人の伝誦に上らず」、「鷹山公の名を聞くも其の何国の人なるやを知らざるもの多し」という状況だったという。このときすでに米沢の版元から版行されていた『羽陽叢書』は、旧米沢藩士が編んだ『甘棠篇』(文政九二八二〇年序、鷹山著述集や『翹楚篇』(寛政元二七八九)年序、鷹山言行録)を収録しており、鷹山自身が著した文章や平生の逸話を窺いうる書籍である。ところが川村惇は、「羽陽叢書の体裁たる尋常著書の類と其趣を異にし、略ぼ公の生平を知ものに非ざれ

バ、一読一過以て絶代の名君たるを了得する能はざる」と評している。一八九〇年代に入り、近世に成立した著述集や明君録に対する需要が継続する一方で(例えば⑩は『翹楚篇』の原文を収録)、「尋常著書」たる新たな伝記が求められていたと見られるのである。

このように見たときに改めて注目されるのは、一八九〇年代前半に、上杉鷹山の逸話を載録した修身教科書が次々刊行されるとともに(⑤⑥⑦)、明治期に入って新たに編まれた鷹山伝記が刊行され(⑫⑬)、英文の日本人論⑭にも鷹山が大きく取り上げられるなど、近世に成立した明君録や伝記類とは異なる形で上杉鷹山が取り上げられ始めたことである。書籍の刊行から見る限り、一八九〇年代前半(明治二〇年代半ば)に、「明君名君」としての上杉鷹山への関心が急激に高まったように見えるのである。

これらの書籍のうちでも注目されるのが、『朝野新聞』紙上に連載された記事をもとめて刊行された、川村惇『米沢鷹山公』⑪である。というのも、上杉鷹山の伝記として発表された連載記事は、「掲載以来、非常の喝采を博し」、「四方の購読者より従来掲載せるものを集めて一冊子となし、印刷に附せんことを勧告し来るもの数十人の多きに及び」⑮というように識者の注目を集め、加えて、後の伝記執筆者にも大きな影響を及ぼしたと見られるからである。同

年に刊行された渡部乙羽『上杉鷹山公』⁽¹²⁾が、「世上公の事蹟を精細に記述したるの書甚だ少なし」と述べる一方、『米沢鷹山公』を参考文献として挙げ、秋山悟庵『上杉鷹山言行録』⁽¹³⁾は「最近著には河村淳氏著の『米沢鷹山公』……を参考して大に得る所があつた」とし、内村鑑三『Japan and Japanese』も、上杉鷹山を記述するにあたって『米沢鷹山公』に全面的に依拠したとされるのである。⁽¹⁴⁾

そこで以下、川村惇『米沢鷹山公』に注目して、この時期の鷹山像描出について考えてみよう。川村の人物については後述することとして、ここではまず、『米沢鷹山公』の内容面での特徴から検討してみよう。当時、『朝野新聞』の主筆であつた川村惇が『米沢鷹山公』を著すことになつた契機は、一八九二年八月、西郷従道に随行して東北地方の巡歴に赴いたことだつた。米沢に入った川村は、「足一たび米沢の地を踏み、上杉治憲の治蹟今猶ほ民心を感化するの深きを観るに及んで、想古の情更に益々切なり」とその感慨を記し、米沢の現状について次のようにいう。すなわち、「田園能く開け耕牧能く整ひ、蚕桑製糸の事盛んに行はれ、其経営の跡歴然たるを見る、……維新革命を距る亦茲に二十六年、其間社会百般の事混乱顛倒悉く旧を去て新に就き、……独り治憲の経営今に益々光彩を放つ」と。川村は、殖産に関する鷹山の治績が、民心を深く感化し続

けるとともに、養蚕・製糸業を中心とする米沢の産業の基礎を築いたと見、それが明治維新を経てなお輝き続けているとして称賛するのである。

川村がいう上杉鷹山の「経営(殖産政策)とは、「年々五十両に五十貫文つゝの苗木を買上げ置き四民の願に應じて之を恵貸し、且公自ら夫人其他を督励して本丸の大奥並に餐霞館の奥に養場を開き、一本にても桑樹を植ゆるものへは金銭を与へて之を賞し」というものである。近世後期に強調され始めた鷹山の明君逸話を踏襲している(後述)。

こうした殖産奨励策に関わる明君逸話が迫真性を持つのは、「上杉の製糸」が明治二〇年代半ばにあつても「貿易品の尤物たる名を博し」ているとの認識があるからである。このような認識に基づいて川村は、鷹山による「殖産奨励」を「国家全体の上に云ふべからざるの利益を与へた」と評価する。前述の佐竹義和同様、近世明君の事績が一藩内の統治という基準を越えて、明治期の「国家全体」にどのような「利益」を与えているかという基準から、再評価され始めていることを読み取ることができよう。

こうして、上杉鷹山が「政治と実業と相併行せざれば国家の進歩得て期すべからずとなし、政治の改良をなす其の一方には全力を挙げて殖産奨励に汲々として」努めたことに、「公の一生の事業中其の最も著るしきもの」が見出さ

れる。すなわち、「政治の一方に偏し」た事績により「名声天下に馳せたる諸侯」に比して鷹山は、「政治の改良」のみならず、「実業」「殖産奨励」すなわち経済・産業政策に力を注いだことで、維新後まで国家全体に及ぶ経済的利益をもたらし「名君賢主」だといっているのである。「実業」振興・「殖産奨励」が国家的課題とされた、当該期の状況を反映した明君像の創出が試みられていたことが理解されよう。¹⁸⁾

では、川村惇によるこのような明君像の描出は、当時の政治・社会の中でどのように位置づけられるのだろうか。川村の経歴に沿って考えてみよう。川村は、元治元（一八六四）年、常陸国稲敷郡太田村に生まれ、土浦師範学校から慶應義塾に入り、一八八四年『静岡新聞』主筆等を経て、一八八七年、福岡県知事・安場保和に招かれて、頭山滿が国権論宣伝のため創刊した『福陵新報』の主筆となった。三年余りの福陵新報時代、川村は、熊本の佐々友房らと国権論を主唱し、福岡玄洋社と熊本国権党の連合を成就させたとされる。その後、一八九〇年一月に『大阪毎日新聞』社長の渡辺治に譲渡されて大成会・国民協会の機関紙となった『朝野新聞』において、主筆を務めることとなった。一八九三年三月二三日から六月二日まで同紙上に五七回にわたり連載された「米沢鷹山公」は、こうした中で執

筆されたものである。記事をまとめて同年一〇月に刊行された『米沢鷹山公』には、品川弥二郎が序文を寄せた。

以上の経緯から明らかになるのは、川村が、国権論を主唱する文筆活動を通して国家主義的な政治運動に関与した人物だったということである。とりわけ注目されるのは、『米沢鷹山公』の執筆・刊行が、設立されたばかりの国民協会の活動と密接不可分だったと目されることだ。一八九〇年一月に議会が開設されると、自由党・改進黨を中心とする民党が政費節減・民力休養を掲げて激しく藩閥政府に迫っていたが、これに対して大成会などの「史党」が、政府の富国強兵策を支持して与党的位置に立っていた。²⁰⁾ こうした中、地租軽減を要求する民党の民力休養論に対して、軍拡・産業育成予算の充実を主張した富国強兵論によって「積極主義」を掲げた第一次松方内閣の下、同内閣に強い影響力を持つ西郷従道（元海相・薩派元老）を会頭に、選挙干渉の責任者として同内閣内相を辞任した品川弥二郎を副会頭に迎えて発足したのが国民協会である。川村が主筆を務めた『朝野新聞』は、この国民協会の機関紙となっていた。川村による『米沢鷹山公』執筆が、国民協会の結成・活動と不可分のものだったことは明らかだろう。

こうして「殖産奨励」を軸とする上杉鷹山明君像は、実業振興、軍備拡充、国権拡張を綱領に掲げ、対外硬派の側

面を強めていった国民協会、すなわち、富国強兵・殖産興業を「国是」とした藩閥政府を支持する「吏党」の立場から描き直されることになったのである。

二 近世の明君像と「富国」論

では、以上のような明治期における上杉鷹山像の描出は、近世における明君像とどのように関わっているのだろうか。まず指摘できるのは、すでに近世後期から、代表的近世明君の措定と共通認識化が進み始めていたことである。

例えば、文政九（一八二七）年から翌年にかけて、上杉鷹山の「言行録」を編集すべく、米沢藩の記録所で重ねられた評議の過程などを記した「御記録所局中之留」〔上杉文書六〇九〕には、「上杉鷹山の御美名四海二轟き、天下古今之明君を数て五君と奉称、其一二御はしまし候よし」〔文政一〇年二月〕との記述がある。この「五君」について、当時、同藩記録所に勤めていた小田切盛敵は、天保二（一八三三）年三月の序文を持つ『仰止録』（国立国会図書館蔵で、「水戸義侯に西山遺事有り、熊本侯に銀台遺事有り、岡山侯に君則有り、会津侯に言行録有り、皆邦君の訓えたるべし」〔仰止録自序〕、原漢文と記している。「水戸義侯」以下は、言うまでもなく、徳川光圀・細川重賢・池田光政・保科正

之である。上杉鷹山を含めて明治期に明君として広く知られたこれらの大名は、近世後期にはすでに「五君」として、近世を代表する明君に措定され、共通認識化の端緒が形づくられていたのである。仙台藩の佐伯是保が、「儉約ト申ハ、和漢古今聖主明君美德、治国之要用と奉存候。近クハ奉始、東照宮、水戸黄門君、芳烈君、細川銀台様、上杉鷹山殿、厳に御守被成、治国之御成功御座候」〔佐伯是保意見書〕〔大日本古文書 伊達家文書 九〕と述べているのも、類例の言及として注目されよう。

こうした代表的明君の措定に大きな意味を持ったと考えられるのが、彼らの言行を記した「明君録」の成立と流布である。前掲「御記録所局中之留」に、「翹楚篇のこたく伝写して流布いたす……」〔文政九年一〇月条〕、「近来他藩之人まで伝写いたし」〔同一〇年二月条〕とあるように、荻戸善政（大華）が側近としての経験をもとに著した上杉鷹山の「明君録」〔翹楚篇〕は、藩外の人々によって筆写されて流布していた。さらに、「四君之御言行を記し候冊子を今相候へハ、実ニ其世を欣慕せられ申候」と、上杉鷹山以外の「四君」についても、小田切盛敵が言及した「西山遺事」〔銀台遺事〕「君則」〔言行録〕などの明君言行録を通じて、その治績を知られ称揚されていたのである。

ただし、これらの明君録は、君主として持つべき心構え

や徳性、日頃から立ち居振る舞い、国家や統治のあり方を説いたもので、基本的に「邦君の訓え」すなわち当代・次代の藩主の教訓となるべき君主論として書かれたものである。従って、載録される逸話は、君主としての身の律し方、士民に対する教化(徳化)や安民への思い、そのための学問への取り組みなどに関わるものが多い。政策でいえば、家臣に対する教諭や善行者表彰などの庶民教化策、飢饉対策への取り組みなどが前面に出され、近世後期にかけて政治的に重みを増す、殖産や貨殖といった経済政策——「富国」策については、後景に退けられているのである。

このような明君像に変化が表れてくるのは、一九世紀に入ってからである。そうした変化が最も顕著に見られる米沢藩主・上杉鷹山を例に見てみよう。まず注目されるのは、明君録において産業振興に関する逸話が大きく取り上げられるようになることである。米沢藩士・服部豊山が天保二(1811)年に著した鷹山明君録・『養霞館遺事』(山形大学附属図書館菅野家文書)では、鷹山が自らの「御台所料」から支出して養蚕を奨励したことを契機に、数多の者が桑畑を開き養蚕業に出精して、「絹糸真綿の出産繁昌し、闔国之潤色年々に増益」とたとえられる。こうした経済的利益の拡大が「皆公の御賜物なり」とされ、「義を利とするの治道」として称揚されるのである。藩を基本的単位としながらも、養蚕奨

励の逸話が産業振興——「富国」の実現という文脈で取り上げられた点、君主の道徳的行動と経済的利益とを相即的なものと捉えないが故に双方の同時の実現を高く評価する点(「義」「利」「政治」「実業」)で、明治期に描出された明君像の原型が示されているよう。

さて、幕末にかけての米沢藩政は、「其政績……輿人誦之」(安井息軒『読書余適』天保一三年)とか「今之言政、首推米沢」(小宮山南梁、京都大学附属図書館所蔵『翹楚篇』奥書、安政三(一八五七)年)といわれたように、とりわけ識者の間では政治の基準として「輿論」化していく⁽²²⁾。幕府が度々にわたり米沢藩政を表彰したこと、当時の学問のセンターだった昌平坂学問所での評価が高かったこと、『翹楚篇』等の明君録が広く流布したことなどがその契機といえよう。

こうした中で、米沢藩への関心を高め、実際に現地を訪れて藩領の様子を見しようとする学者や武士らが増えるようになる⁽²³⁾。注目されるのは、彼らが「富国」論的な明君像を一層強調し、鼓吹する役割を果たすようになることである。例えば、昌平坂学問所で松崎慊堂に師事し、水野忠邦らに仕えた塩谷岩陰(一八〇九―一八六七)は、嘉永二(一八四九)年、主君水野家の領地山形に向かう際、米沢藩を通行して次のように記している。「山間田与圃。隙壤漆将桑。野無遊惰叟。……黎庶怠怠遑。男女務耕蚕。無尺地荒。厚

生兼利用。富強甲東方」(山間の田地の合間には漆や桑が植え込まれ、遊閑地は一切ない。……庶民は怠ける暇もなく、男女とも農耕・養蚕に勤しみ、荒地地は皆無、人々は豊かにくらししている。その「富強」は東方に冠たるものだ、「浴沢遺香」『岩陰贖稿』巻三)。幕臣で文人代官ともいふべき林鶴梁(一八〇六―一八七八)も、安政六年八月、出羽国村山郡の支配地に赴いた際に米沢藩領を通行して、次のように記す。「貨物盈市、其民勤於耕織。地、宜漆、宜桑、宜麻苧、土物充溢、……因想昔時鷹山公美政猶存。……亦足見民力能至也……其間、田野闢桑麻茂、……君臣和睦、能然其政、以致富強之功」(「貨物は市に溢れ、領民は農作業や機織りに勤しんでいる。土地は漆・桑・苧の栽培に適して作物に満ち溢れ、……かつての鷹山公の美政が今に続いていることを思う。……「民力」が充実していることがよく分かる。……君臣が和睦して政治を行い、「富強」を実現している、「米沢紀行」『鶴梁文鈔 卷九』)。彼らは、美田と商品作物の生産、藩領の豊かさ、人々の勤勉さを上杉鷹山の「美政」によるとした上で、米沢藩を「富強」と呼ぶのである。

彼らが米沢藩の「富強」を強調する背景にあったのが、北方からのロシアの接近をはじめとする対外関係の緊迫である。筑前国久留米藩校明善堂助教から藩主有馬頼徳の小姓となり、江戸で昌平黌に学んだ同藩士・村上量弘(一八一〇―一八五〇)は、天保一四年、水戸藩の会沢正志斎から

「天下を周流し……風俗の醇醜・人情の厚薄・君相の賢否・政蹟の得失、以て観るべく以て戒とすべし。……兵財の強弱羸縮、及び夷蛮戎狄の宜しく慮はるべく備ふるべきは……」(『送村上生序』)との言葉を贈られて、米沢等の諸国を巡歴し、『米沢会津見聞録』を著している。村上は、欧米諸国接近の脅威に対する備えを、全国各地の現実、諸藩の風俗・人情・君相・政蹟を踏まえて構想するという目的を持って、米沢での見聞を記録したのである。先に挙げた塩谷宕陰は、清国が欧米諸国に敗れたアヘン戦争の衝撃を強く意識して、対策を求める政治論を度々著しており、林鶴梁も、尊王攘夷を唱えた人物であることが知られる。藩命で蝦夷地調査に赴く際に永山徳夫(佐賀藩士)が著した『庚子遊草』、尊王攘夷派として国事に奔走した柴山典(二八三二―一八八四、久留米藩士)の手になる『見聞漫録 米沢』も類例といえよう。以上のように、殖産政策や養蚕業の隆盛に着目した「富強」という観点からの明君像描出の背景には、幕末期にかけての対外関係の緊迫に伴う危機意識の高まりがあったといえよう。

そして「富強」の観点から描かれた鷹山明君像は、維新後の地方行政官らに一度引き継がれていったと推測される。右に挙げた柴山典は、維新後に宮谷県知事(現千葉県)に任じられているが、米沢で見聞した「伍什組合」に極め

て類似する「伍什長制」の組織を管内に命じている²⁵。また、薩摩藩士から山形県令等を務めた三島通庸は「羽陽叢書」叙文で、「(上杉鷹山は)国を治め民を憐ミ、教の道はいふも更なり、専ら物産の事業をおこし、……殊ニ養蚕をはしめ機織なりはひを家ことに授け玉ひ……たくひ稀なる勲功ならずや」と述べている。これらの延長上に川村惇の明君像が現れたのだとすれば、「富強」の観点から描き出された鷹山明君像は、明治期の「富国強兵」論の一角に組み込まれていったと見なければならぬだろう。

ただし、幕末期にかけての米沢藩見聞録が一樣に、藩領の町村に居住する領民の生業とくらしに目を向けていたことは、見落とすべきでない。曰く、「民屋無荒廢者……封内無甚窮困者、質而実、往々見倉庫、沿途十里、数見空屋二三耳」(永山徳夫『庚子遊草』)、「無一人凍餒、而米沢尤裕」(安井息軒『読書余適』)、「村村垣屋潤。到处多廩廩。勤儉長者里。淳茂君子郷」(塩谷岩陰『浴沢遺香』)、「足見民力能至也……郵駅村里居民皆潤。未嘗見一廢宅也」(林鶴梁『米沢紀行』)。いずれも、米沢藩領内に困窮した民・荒れた家屋が皆無であること、「民力」が充実し、宿駅・村々の民家が豊かな潤いを見せていることに、これを高く評価する角度から言及している。見聞録の著者たちにとつて、領民の貧富や「民力」こそが、藩を評価する上での重要な判断基準

だったのである。明治期に入っても、若松雅太郎(大分県士族著『興業殖産亀鑑』)は、維新以前に西国のある大名が、列強の大鑑巨砲ではなく金巾を恐れるべきだとして、武備ではなく殖産興業に専心したという逸話を紹介し(緒言)、上杉鷹山について、「民力ヲ愛養スルヲ以テ財政救済ノ主脳トナシ」、「富国安民ノ基ハ唯殖産興業ノ一途ニ在リ」と述べたとして、「賢明ノ仁君」と呼ぶ。このような捉え方は、経済力・軍事力で欧米諸国に追いつくことを目的とした国家本位の「富国強兵」策(藩閥政府による「富国強兵」路線)よりは、近世の「富国安民」理念や民党の「民力休養」論と親和的だと考えられるのである。

おわりに

本稿では一九世紀を対象として、近世明君像の共通認識化や変容過程について考察してきた。こうした明君像の変容に関連して、若尾政希は、政治体制の大きな変化を経ながら、一九世紀を通じて「同じような通念・常識が通用している」と指摘しているが、明君像の共通認識化も、一九世紀を通じた動向と見ることができよう。すなわち、一八世紀後半に端を発した代表的明君像の措定は、一九世紀に入って共通認識化する趨勢を示し、明治期には、そうした

事態が刊行書籍を通して一層進んだのである。近世に成立した明君録が学校・家庭での修養に資するとして原文で何度も刊行されたこと、修身教科書に近世明君の逸話が相当数載録されたことも、それを裏づけている。

さらに、明君像の内容を見れば、対外関係・国際関係に規定されて、「富国」「富強」への寄与という指標が君主（將軍・大名）に対する評価において重みを増していくことも、一九世紀を通じた動向だといえる。近世においては、欧米列強の接近に危機意識を高めた藩士・学者らを通して、「藩の」「富国」「富強」という観点から明君像が描き出され、明治期には、「富国強兵」を国是とする明治政府側の「吏党」的立場から、一藩を超えた国家全体への裨益という観点を織り込みつつ、近世明君像が再編されたのである。こうして、近世社会が生み出した明君像は、明治政府の富国強兵路線に回収されていったように見えるが、必ずしもそうした側面ばかりではない。大藤修は、明治期の報徳運動の指導者・岡田良一郎の思想に、「国民生活の犠牲の上に富国強兵を図る国家」に直結しない「富国安民」論を見出している²⁷。本稿でも「民力」を重視した明君評価の一端を垣間見たが、こうした思想の流れについては、近世・近代を通して多角的な検討が行われるべきであろう。

以上、「仁政」「明君」「富国」などの政治理念は、明治

維新という政治体制と社会的磁場の大きな変化を経て政治的・社会的意味の変容を蒙りながらも、一九世紀を通じて人々の政治意識・思想に小さくない影響力を持ち続けたと考えられる。本稿では、近年研究が進展している維新时期（以降）の人物顕彰や儒学思想の役割など、本稿と密接に関わる論点に触れられず、踏み込んで検討すべき多くの事柄が残ってしまったが、近世後期の政治理念や政治常識という視角から、近世・近代を見通すような研究が一層求められることを指摘して、ひとまず稿を終えたい。

- (1) 深谷克己「明君録（鵜飼政志ほか編『歴史をよむ』東京大学出版会、二〇〇四年）。
- (2) 深谷克己「偃武の政治文化」校倉書房、二〇〇九年、若尾政希「享保」天明期の社会と文化（大石学編『享保改革と社会変容』吉川弘文館、二〇〇三年）、小関悠一郎『明君』の近世（吉川弘文館、二〇一二年）等。
- (3) 牧原憲夫「客分と国民のあいだ」吉川弘文館、一九九八年）、小川和也『牧民の思想』（平凡社、二〇〇八年）終章。なお、小林丈広「幕末維新时期京都における都市振興策と公共性」（『日本史研究』六〇六、二〇一三年）。
- (4) 椿田有希子『近世近代移行期の政治文化』（校倉書房、二〇一四年）。
- (5) 倉地克直『徳川社会のゆらぎ』小学館、二〇〇八年）。
- (6) 以上、小関悠一郎「明君像の形成と「仁政」的秩序意識の変容」（『歴史学研究』九三七、二〇一五年）、同「江戸時代の『富国強兵』論と「民利」の思想」（『日本歴史』八四六、二〇

一八年)、近世後期の民衆教化について、殷曉星「近世日本の清聖論受容と民衆教化」(『歴史評論』八二四、二〇一八年)。

- (7) 秋田には八月一日・二日に滞在している(内国電報)『東京朝日新聞』一九〇九年八月一日(二〇日)。小野島幸子「韓国併合に関する一考察―韓国皇太子英親王李垠の日本留学」(『北大史学』二八、一九八八年)も参照。

- (8) 大久保鉄作(一八五〇―一九二二)は、秋田藩士の家に生まれ、藩校明德館に学んだ。一八七五年に朝野新聞入社、秋田日報主幹を経て、秋田改進黨を組織、秋田県会議員から衆議院議員(一八九八年、当選二回、政友会)。一九〇六年から一一年間、秋田市長(『日本人名大辞典』)。

- (9) 大久保鉄作「天樹院佐竹義和公」(同人、一九一六年)二頁。

- (10) 「最近出版書」(『読売新聞』一八九三年一月一日)。

- (11) 堀田璋左右・川上多助編 国史研究会刊。既述の他、徳川家康・家光、徳川義貞・光友、伊達政宗、立花宗茂、前田利家・利常・綱紀、井伊直孝、酒井忠勝、板倉重矩、島津重豪、徳川斉昭、徳川慶勝、津軽信政・信明らの言行録・逸話集、近世の典型的明君録が多く収録されている。

- (12) 「(広告)国史研究会 日本偉人言行資料 堀田璋左右 川上多助共編」(『東京朝日新聞』一九一七年九月四日、一頁)。

- (13) 佐竹義和とその改革は戦後、「明君」による藩政改革の典型とされ、現在の高校日本史教科書にも、改革に成果を挙げた「名君」と見なされた藩主として記載されている。

- (14) 『羽陽叢書』は、米沢藩土甘糟継成が文久二(一八六二)年に成稿した上杉鷹山の言行録「鷹山公偉蹟録」が、一八七八年に「天覧」に備えられたことを契機に刊行されたものである。上杉鷹山の神格化・贈位、史跡の顕彰の問題と併せて重要な問題であるが、本稿では捨象せざるを得なかった。

- (15) 『朝野新聞』一八九三年六月三日。連載最終回。
- (16) 鈴木範久「代表的日本人」を読む(大明堂、一九八八年)。

- (17) 明治期の米沢における養蚕・製糸業については、『米沢市史 近代編』(一九九六年)。

- (18) 「実業」に関しては、「実業家」への期待が高まった明治二〇年代以降、偉人像形成の重要な要素とされたことも注目される。伴野文亮「金原明善の「偉人」化と近代日本社会」(『書物・出版と社会変容』一六、二〇一四年)。

- (19) 服部鉄石「英城人物評伝」(同人、一九〇二年)等。

- (20) 坂野潤治『明治憲法体制の確立』(東京大学出版会、一九七一年)。

- (21) 小関前掲「明君」の近世参照。

- (22) 小関悠一郎「藩政改革研究の現状と課題」(『地方史研究』六七―三、二〇一七年)。

- (23) 以下、小関前掲「明君像の形成と「仁政」的秩序意識の変容」。

- (24) 徳田武「塩谷岩陰年譜稿」(『江戸風雅』一四、二〇一六年)。
- (25) 三浦茂一「明治初頭の直轄県における人民教化政策の推進」(『千葉いまむかし』一二、一九九九年)等。

- (26) 若尾政希「近世後期の政治常識」(明治維新史学会編『明治維新と思想・社会』有志舎、二〇一六年)。
- (27) 大藤修「近世の村と生活文化」(吉川弘文館、二〇〇一年)。

- 近世の「武威」「仁政」と「富国強兵」論について、須田努「江戸時代の政治思想・文化の特質」(趙景達編『儒教的政治思想・文化と東アジアの近代』有志舎、二〇一八年)。
- (こせき ゆういちろう)